

ウなどの専門家である前川文夫先生に現物を送って同定を依頼した。先生からは折り返し、それは新種であり、*Arisaema umegashimensis* ウメガシマテンナンショウ (前川命名) と返事を頂いた。正式発表を首を長くして待ちわびたが、何らかのご都合があつてか、発表はなかつた。杉本先生も発表する気がなく、前川先生からの通知の裸名のままそのまゝになり、今日に至つたのである (杉本 1967, 1973, 1974, 1984)。

しかしながら、図らずも2008年春、東大の邑田 仁、柿嶋 聰両氏によって分布域を広げた上で新種として正式に発表された (Murata and Kakishima 2008)。これで一段落し、私の名はないものの、感激一入である。

邑田・柿嶋両氏によって発表された学名は *A. maekawai* J. Murata & S. Kakishima とされ、タイプ標本は山梨県南巨摩郡南部町内船 (標高1000 m) の天子ヶ岳西麓で採集したものが当たられた。前川先生の裸名は廃棄されたが、種小名は前川先生に献名された。和名は以前のウメガシマテンナンショウが採用されている。

本種はホソバテンナンショウに最も近縁であるが、仏炎苞の内軸面の周辺を除き、中央部に細乳頭を密布して粉白色を帶び、付属体がより太いことで区別できる。杉本 (1984) はウメガシマテンナンショウは静岡県の固有種として、次の六ヶ所が記載されている; 安倍峰 (大村・杉本、実際は梅ヶ島温泉から安倍峰へ登る途中の林下)、梅ヶ島温泉奥 (杉

本)、真富士山 (大村)、山伏岳・井川峠・玉川の奥仙俣・三伏峠 (黒沢)。Murata and Kakishima (2008) は、静岡県内では、梅ヶ島温泉～関の沢、本川根町閑蔵～長島、梅ヶ島大滝、蓬沢、梅ヶ島温泉～安倍峰、富士宮市天子ヶ岳、山梨県では、南巨摩郡南部町天子ヶ岳、安倍峰道、南部町小草里、長野県では、下伊那郡清内路村が記載され、静岡・山梨・長野の三県に分布していることが判り、静岡県の固有種ではなくなつた。

ウメガシマテンナンショウの発見当時前川先生に同定を依頼したのであるが他に発表して下さる専門家が見当たらぬことで現在までそのままになつてしまつたのであり、また同定を依頼した標本の所在が不明と思われる所以、ここに経緯を記した次第である。

#### 引用文献

Murata J. and Kakishima S. 2008. *Arisaema mae-kawai*, a new species of the *Arisaema serratum* group (Araceae) from Japan. *Acta Phytotax. Geobot.* **59**(1): 45–50.  
 杉本順一 1967. 静岡県の植物. 静岡県生物研究会. (ウメガシマテンナンショウ, p. 487)  
 杉本順一 1973. 日本草本植物総検索誌〈単子葉編〉. 井上書店, 東京. (ウメガシマテンナンショウ, pp. 238, 246)  
 杉本順一 1974. 大村敏朗氏略伝. 東海自然誌(1): 75–77.  
 杉本順一 1984. 静岡県植物誌. 第一法規出版, 東京. (ウメガシマテンナンショウ, p. 696)

(420 [REDACTED] 静岡市 [REDACTED])

植物研究雑誌 84: 124–126 (2009)

#### 日本の植物学とローマ字の問題2. 新和名の発表とローマ字 (金井弘夫)

Hiroo KANAI: Japanese Botany and Roman Spelling 2. New Japanese Plant Name and Its Roman Spelling

Summary: The Roman spelling of new Japanese name usually shown under the new scientific name is merely a phonetic rendition of the Japanese name and does not represent Japanese spelling.

わが国の高等植物の分野では、新植物を発表するとき、その和名を与えるのが通常のやり方である。それが新しいタクソンである場合、国際植物命名規約に則った新学名が記され (その発表頁を a 頁とする), その直後に

新和名が記される（b 頁とする）のが通例である。その新和名はローマ字で表記され、仮名綴りを伴わないのもこれまた通例である。新和名の仮名綴りは文末の和文摘要で初めて表記される（c 頁とする）のが、これも通例である。ときには文の先頭の表題に、新学名と共に新和名の仮名綴りが現れるときもある。そして（これが問題なのだが）、年度末あるいは一定期間後の総索引や、本誌の場合にはその号の表紙裏では、新和名の発表頁はローマ字綴りのある b 頁とされる。この原稿を書いているときに参照できる最近の例として、本誌82巻6号のソウヤキンポウゲの発表を見ると、 $a = 321$ 、 $b = 324$ 、 $c = 327$ であり、6号の末尾にある総索引ではソウヤキンポウゲの（仮名綴り）名は324頁（b 頁）に発表されたことになっている。ところが324頁をみると Japanese Name: *Sôya-kinpôge* (nom. nov.) であり、「ソウヤキンポウゲ」ではない。このローマ字綴りを仮名文字に翻字すれば「ソーヤキンポーヌ」であり、これまた「ソウヤキンポウゲ」ではない。和文摘要から察するに、著者は新和名として「ソーヤキンポーヌ」を与えたとは思われないので…。

私が植物研究雑誌の総索引作りにかかわったとき、最も悩んだのは、この新和名のローマ字発表と「本当の」新和名との綴りの違いであった。日本の研究者は、また学界誌の編集者は、新和名の発表をなぜローマ字で、それも本当にわれわれが使う仮名綴りに翻字できないローマ字綴りで、発表するのだろうか？

1982年の日本植物学会創立百周年記念大会の際、植物学雑誌のスタイルを「近代化」する非公式の検討会があった。ここでは「外国の研究室では、漢字や和文の入っている雑誌は読まない、あるいは読むのを後回しにされる。だからそういう文字はない方がよい」という意見を強く主張する人が一人ならずいた。それと同様に、外国人が読む新名発表の部分に、異質な仮名文字や漢字を挟まぬ方がよいという編集方針なのだろうか？

また、上のような表記の仕方では、ローマ字綴りが発音記号に過ぎず、本来の仮名綴りと対応するものではないということが認識されていないために、ローマ字で発表した和名がその仮名綴りと同等であるとの思い込みが

行き渡っているからだと思う。それが誤解だということは前記したし、本シリーズ1でも述べた。

私は、新タクソンに対する新和名の発表は、その学名の発表の直後であるのがよいと思う。そうすることで新和名は、新学名やそのタイプと密接に関連づけられるからである。したがって、日本の発表誌である限り、現在普通に行われているローマ字による新名発表の位置に、新和名の仮名綴りを置くのが適切と考える。それを仮名文字の知識のない人に読ませるために、ローマ字綴りを添えるのは親切な配慮と思う。その綴りは、発音記号だろうと仮名綴りの翻字だろうと、訓令式だろうとヘボン式だろうと、著者の好みのままでよからう。和名は直前に表示されているので、これらはせいぜい「別名」としての意味しか持たない。もしその和名の意味を説明したければ、漢字綴りを添えるのもよいだろう。日本文字のフォントを持たない外国誌の場合、新和名を記したければローマ字にせざるを得ないが、その綴りは、和名の仮名綴りを反映するものであるべきだ、今回の例なら、それは「*Souya-kinpouge*」だろう。それを何と発音するかまで記したければ、発音記号「*Sôya-kinpôge*」をつければよい。

和名には発表の規則はない。しかしその初出頁の情報は、研究上必要である。新和名を表題の中に含める人は少なくないが、この場合その和名の初出は表題の頁となり、何の説明もなくいきなり新和名が出てくることになる。それでも初出は初出だから、私の作った総索引ではそういうケースがときどきあり、後になって「これは違う」と言わされたことがある。これはむしろ発表者の責任ではないかと思う。発表の規則がないのだから、「初出」の頁が初出頁になるのは当然ではないか。表題に新学名が含まれていても、命名規約があるからこそ、それは「裸名」あるいは「先行同名」にすぎず、その頁が初出頁にはならないのだと思う。索引の作成者が著者に代わって一々首をひねらねば初出頁を決められないような新和名の提示は、混乱のもとである。ソフト的に全文検索を行って索引を作るようになれば、それが問題となるに違いない。こういうことをやろうとすれば、長音記号つき

文字を扱えないことは別に、現行のような表示ではローマ字綴りから和名綴りを作り出せないことに気付くだろう。

(184- [REDACTED] 小金井市 [REDACTED] [REDACTED]  
[REDACTED] [REDACTED] Koganei-shi,  
Tokyo, 184- [REDACTED] JAPAN)

## ニュース

### おしば標本貼付用ラミントンテープの復活 (金井弘夫) Hiroo KANAI: On the Revival of "Laminton Tape"

**Summary:** "Laminton Tape", polyethylene-laminated paper tape to mount herbarium specimens, is announced by the Futaba Manufacturing Co. to come back into the market after a long break.

ポリエチレンラミネート紙のテープをハンダ錫で熔着する「ラミントン」は、おしば標本を多量に扱う標本室に今や普及しているが、10年ほど前から発売元の双葉製作所が「製作が困難になった」としてテープの供給が乏しくなり、まとめ買いしたり代替品を模索するなど、それぞれのところで工夫が重ねられている。私もシートものからテープを切り出す方法を提案したりしてきた。このたび同製作

所から「テープの確保ができるようになった」との知らせがあった。主なユーザーのところへは連絡されていると思うが、更なる普及を期待してここに記しておく。ラミントンの開発は双葉製作所の故羽代 茂氏の努力によるものだが、近頃はこの種の個人企業の経営はなかなか難しいようなので、早いうちにせいいぜい利用されることをおすすめする。連絡先と値段は次のとおり。

双葉製作所 155-0031 東京都世田谷区北沢3-8-10 (Tel/Fax: 03-3466-7702)

貼付器 26,000円。テープ1巻 10 mm 幅600円； 5 mm 幅 500円。

(184- [REDACTED] 小金井市 [REDACTED] [REDACTED])